

2023 年 10 月 1 日 聖霊降臨節 第 19 主日礼拝 聖餐礼拝

説教題：「罪人(つみびと)を招かれる主」聖書箇所：ルカによる福音書 5 章 27 - 39 節

説教者：秀島牧師

招詞：讃美歌 93 - 1 - 53 交読詩編：第 48 編 1 - 15 節

讃美歌：83 (聖なるかな) / 300 (十字架のもとに) / 459 (飼い主わが主よ) /

81 (主の食卓を囲み) / 27

「今週の聖句」 「イエスはお答えになった。「…私が来たのは、正しい人を招くためではなく、
罪人を招いて悔い改めさせるためである。」」 (ルカ伝 5:31-32)

「牧師室の窓」 「学び舎を出でし時より半世紀恩師墓前に花を手向ける」

「秋彼岸修道院に立ち寄りぬ山なお青き鎌倉の里」

(1)皆様おはようございます。今年は長い夏が続き、数日前までは気温が高い状態が続いていました。その季節が進み、本日から 10 月に入りました。一昨日の金曜日は「十五夜のお月様」、本日は「赤い羽根、共同募金の日」です。教会の暦では、今年は 5 月 28 日の聖霊降臨日・ペンテコステから始まりました聖霊降臨節が本日は第 19 主日を迎えることになりました。今週を含めてあと 4 週間の聖霊降臨節の日々を過ごすことになります。聖霊降臨節の期間はその年によって異なりますが、20 数週間あり、教会の半年と呼ばれています。その期間は教会が聖霊の導きのもとに過ごす期間であります。具体的には、私たちの生命の大切さを学び、私たちの為すべきこと、つまり、使命を学ぶ期間であります。私たちの生活では日常の暦・カレンダーに添って生活をしており、聖霊降臨節の期間は、夏の始まりから、夏休み、平和について考える時、秋の始まり、そして、秋の深まりへと進んでゆきます。イソップ物語の「アリとキリギリス」に似てお話しすれば、聖書をコツコツと読み考える、栄養を蓄える大切な期間であります。只今申し上げました様に教会の半年である聖霊降臨節は、生命の大切さを学び、私たちが生きるための使命を学ぶ期間であることが理解することが出来ます。

(2)今日の聖書箇所では、イエス様の新しい弟子となるレビとの出会いの場面から始まります。このルカ福音書では名前がレビと書かれていますが、マタイ福音書・マルコ福音書では名前がマタイと記されています。先にイエス様の弟子になったペトロ、ヤコブ、ヨハネはガリラヤ湖で魚を捕る漁師で、魚が舟に溢れる程に捕れたという劇的な（ドラマチックな）出会いでありました。今日の主人公レビとの出会いは如何でしょうか。皆様もイエス様一行の一員となって、或いは、報道記者の一人となって本日の場面の中に登場していただきたいと思います。今日の聖書箇所は 5 章 27 節から始まります。27 節 28 節を読みますのでお聞き下さい。〔(ルカ伝 5:27)その後、イエスは出て行って、レビという徴税人が収税所に座っているのを見て、「わたしに従いなさい」と言われた。/(5:28)彼は何もかも捨てて立ち上がり、イエスに従った。〕ここに書かれている

「収税所」とは税金を取り立てるための場所・建物であり、「徴税人」とはローマ帝国のために、ユダヤ人から税金を取り立てる請負人でした。決められた金額以上に取り立てて自分の懐に入れていたのでしょうか、ユダヤの民衆からは排斥をされており、「罪人」と看做されていました。そのようなことからレビという徴税人は友人もなく孤独な生活をしていたのでしょう。そのレビをイエス様は「座っているのを見て」声を掛けたのです。このルカ伝には「見て」と書かれていますが、並行記事であるマタイ伝及びマルコ伝には「見かけて」と翻訳されています。その違いはルカ伝のギリシア語の意味は「熟視する、観察する」という意味です。イエス様は通りすがりに見たのではありません。イエス様には何か感じるがあったのでしょう。「「わたしに従いなさい」と言われた」のです。その呼び掛けに対して、レビは直ちに応じたのです。「何もかも捨てて立ち上がり」とはどのような行動をしたのでしょうか。レビ自身の今までの関心事はおそらくは税金を過剰に取り立て、自分の富を増やし蓄積することでありましたでしょう。イエス様からの呼び掛けはその様な彼自身の過去からきっぱりと離れて、新しい生き方をすることであったと思われます。皆様も人生の中でその様な時がきっとあるはずで、必ずしも大きなことではなくとも、些細なことであったとしても。大切なことは、重要なことは、イエス様の呼び掛けに耳を傾けることでもあります。そのことが私たちの人生を豊かにしてゆくであります。

(3) イエス様の呼び掛けに応えたレビは早速行動を開始します。盛大な食事会を開きました。身分や職業に拘わらず多くの人たちが参加しました。イエス様が、世間からは罪人（つみびと）とされずまされていた人々と食事をするのを見て、モーセの律法を守ろうとする人々はイエス様を非難してきました。イエス様の答えが31節に書かれています。〔(5:31)…医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である。〕この言葉は特別なことを言っているのではなく、極めて当然のことを言っているのです。従って32節の言葉が続きます。〔(5:32)わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。〕と言っておられます。ここに、イエス様の存在理由があります。先日も申し上げましたが、キリスト教を理解するためには、聖書を読んで聖書にはこの様に書いてあると言うのはキリスト教ではありません。聖書と神学と歴史を一体化して初めてキリスト教になり、キリスト教としての価値判断になります。その様にして考えを深めることが重要です。当時のユダヤ社会では「罪人」とは律法を守らない人、神に逆らう人とされていましたが、イエス・キリストは「わたしが来たのは…罪人を招いて悔い改めさせるためである」と言っています。罪人と否定する考え方から、生きる喜びへと全く逆転することになります。…翻って、現代日本の社会でも、何かを否定する、相手を攻撃する、相手にマイナスをつけたがる社会になっています。社会が悪い、政府が悪い、そのような考え方からは良いことは何も生まれません。自立することが大切です。私は若い時に福沢諭吉の本に出会いました。著書『学問のすすめ』は「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と始まっています。その言葉があまりにも著名ですが、諭吉先生の本当に言いたいことは、そうでは

なくて、自分自身が独立すること、そのためには学問を、実学を学ぶことが重要と、言っているのです。福澤は簿記・会計学を学ぶことを勧めています。簿記は当時の言葉で言えば「帳合之法」と言いました。また、『文明論之概略』では福澤はキリスト教を非難しましたが、自分の子供たちはキリスト教の宣教師たちに学ばせたのです。物事を表面的に判断してはいけないことを福澤は経験したからです。

(4)32 節の「罪人を招いて悔い改めさせるためである」のうち「罪」について、もう一言申し上げますと、「罪」とは、ヘブライ語では「ハッタート」と言いまして、「神から離れること、神に対する反逆」であります。そのことが創世記第3章に書かれているエデンの園での神とアダム・エバとの物語です。神は木々の間に隠れているアダムに対して「どこにいるのか」と問い掛けています。私たちは自分を見失った時に、神からの「どこにいるのか」という問い掛けに答えられるでしょうか。旧約聖書には「右にも左にもそれではならない」という言葉がしばしば出てきます。また、「罪」とはギリシア語で「ハマルティア」と言いまして、言葉の意味は「的はずれ」であります。「的はずれ」な生活をしている、人生を歩んでいる私たちをイエス様は「悔い改めさせるため」に招いてくださるのです。

(5)33 節では、イエス様を非難しているファリサイ派と律法学者は、イエス様の弟子たちが何故断食をしないのか、と非難しています。イエス様はどの様に返答されましたでしょうか。34 節 35 節にそのことが記されています。〔(5:34)そこで、イエスは言われた。「花婿が一緒にいるのに、婚礼の客に断食させることがあなたがたにできようか。(5:35)しかし、花婿が奪い取られる時が来る。その時には、彼らは断食することになる。」〕婚礼の食卓とは喜びを共にすることを意味しています。共に食べるということは大切ですね。私は学生時代に下宿生活をしていました。下宿生3人が下宿の家族と共に食事をするのです。下宿のおばさんは旦那さんを亡くされ、洋裁の技術で3人の子を社会人までに育て上げました。私たち学生3人を含めて7人で食事をしていました。おばさんは料理が上手でしたが、食器洗いは手抜きでしたので、ご飯茶碗にはご飯粒が洗い流されずにこびり付いていました。塗箸の先の部分3cm程は塗りが剥げて黒くなっていました。私はそのような食器と箸で食べることに初めのうちは抵抗を感じましたが、食事は会話をしつつ楽しく食べることを学びました。食べ物が貧弱であっても食器が粗末であっても、食べるものと楽しい会話があれば、食事は婚礼の宴会に引けを取ることはありません。学校では習わない社会人教育を私は下宿生活で学びました。…私たちがいただく聖餐式で用意されるのはパンとぶどうジュースのみです。（当教会では、コロナ渦中であって、パンの代わりに個包装のビスケットを、ぶどうジュースの入れ物を牧師が皆様に見える様に掲げて、会衆は心の中で受け取り、食し味わいます。）そして、心の中で祈ります。神への祈りとは神との会話に他なりません。今日の34 節〔(5:34)そこで、イエスは言われた。「花婿が一緒にいるのに、婚礼の客に断食させることがあなたがたにできようか。」〕この御言葉は聖餐式の本質について記されています。そして35 節

〔(5:35)しかし、花婿が奪い取られる時が来る。その時には、彼らは断食することになる。〕には、

イエス・キリストの十字架の死が予告されています。福音書の執筆者は十字架の死を織り込んで書いていることがここから理解できます。推理小説のようですね。

(6)36 節～39 節は聞いていて面白い譬え話です。この譬え話を聞いた誰でも、日常生活の中での生活の知恵であることが理解できます。イエス様は新しい服を、新しいぶどう酒をどの様に対処すべきなのかを示しておられるのです。イエス・キリストと弟子たちが断食もせず、罪人と共に食事をする新しい生活を、律法に縛られた生活とは異なることをお示しになられたのです。私は信徒時代に新しい事業を行なおうとする人たちを応援してきました。法律で言えば、従来の商法から会社法が分離・体系化し、制度面で大きく変化しました。併し、日本では新しいことにチャレンジする人は多くはありません。少数ながらも、高い志と困難に立ち向かう人々がいます。この国が閉鎖的であってはなりません。同じような考え方の人たちだけの社会であっては、友達意識の人たちだけの社会であっては、日本は世界から取り残されてしまいます。「出る釘（くぎ）」を叩くのではなく、常識に捉われる（囚われる）ことの無い「多様性」が時代を切り開くのです。古さを大切にしつつ、新しい未知の分野へと挑戦する社会へと時代は変わりつつあります。古いぶどう酒に縛られることなく、ルカ福音書の今日の箇所は、徴税人レビとともに始まる時代の夜明けを書き記しているのではないのでしょうか。私たちも今日の聖書箇所のこの場面に、この舞台に身を置きイエス様の御声を直接耳にしては如何でしょうか。

・・・お祈りします。